

で、どのような長所があるか、⑤説明モデル (Explanatory model) : 家族はどのような信念や期待を抱いてきているかを挙げ、頭文字をとって「SIRSE」と覚えるるとよいと教えている。この部分を読むだけで、普通の教科書とはまったく違うことがわかりただけだと思う。

各章ごとの分担執筆という形を問わず、同じ考えをもつ二人の偉大な著者によって記された本書には、基底に著者たちの臨床や研究に対する哲学が流れている。本書を読むと、児童精神医学の生物学的研究から心

ダニエル・N・スターン著

『力動感の様々なかたち』

心理学、芸術、精神療法、発達における力動的体験の探求を通して

著者であるスターン (Stam D. N.) は、わが国では著書『乳児の対人世界』(岩崎学術出版社、一九八九、一九九一)を通して精神分析学は言うに及ばず、臨床心理学、発達心理学などの分野においても広く知られている存在である。その最大の理由は、ことばの誕生以前の乳児

理社会的研究まで徹底して科学的な立場をとりながらも、臨床を大切にしている患者と家族の視点を失わない、バランスがとれた著者たちの姿勢が見えてくる。そして、質のよい児童精神医学とは何かが見えてくるのである。児童精神医学に携わるすべての人、あるいは関心のある多くの人に読んでほしいと心より願う。

傳田健三

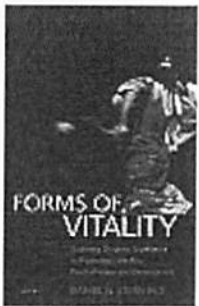
(でんだ・けんぞう) 北海道大学大学院保健科学研究院

乳児のみに限った話ではなく、あらゆるライフステージを通して、多様な精神病理を解く際の重要な鍵となる。

わが国では、それ以前にも『母子関係の出発』(サイエンス社、一九七九)はあったが、その存在が広く認識されるようになったのは「乳児の対人世界」による。ただ彼の名前が巷間に広く伝わった割には、彼の仕事のもっとも重要なところについてはいまだ十分に理解されていない。その最大の理由は鍵概念である力動感の理解の困難さである。「乳児の対人世界」を世に問いてからすでに四半世紀を経過した段階で、スターンがなぜ力動感を真正面から取り上げた本書を出さずにいられたのか。その理由を彼は本書で以下のように述べている。

「私(スターン)はこれまで長年にわたって、臨床経験の力動的観点に関心を持ち続けてきた。そして、この観点からいろいろな専門用語を使用してきた。(中略)なぜこのようにいろいろと用語を変えてきたかといえば、その主な理由は、力動的

な概念を厳密にある特定のことに当てはめることは困難で、私が主張したいことを完全に把握することは決してできないからである。今でもなお新たな試みが続いているが、いまだ満足していない。別な言い方をすれば、用語の変化は必ずしも概念に重要な変化を生んでいるのではない。私の思いは、概念が変わったというよりも、いろいろと異なった概念の枠組みを通して、そのことを改めて強調することであった。本書では、これまでいろいろと述べてきたいくつかの用語を集めて一つにし、それらをより包摂する概念として力動感の様々な形(以後、力動感と訳す) dynamic forms of vitality を用いている。この用語は、以前議論した「時間」と「強度」の他に、「力」、「動き」、「空間」、「方向性」、そして「生命感」を加味したものになっている。



Oxford University Press, 2010.
\$37.95 (U.S.)

本書は三部で構成され、第一部は導入と背景で、三つの章に分かれている。第一章では、力動感とはどのような性質をもつものか振り返りながら紹介されている。第二章では、力動感の概念的枠組みとその性質がさらに詳細に述べられている。第三章では、力動感を用いて、これまでの心理学と行動科学の歴史を大まかに振り返っている。第四章では、力動感の生成において脳幹の賦活系が主要な役割を担っていることを、最近の神経科学的知見を用いて解説し、力動感の概念の正当性を補強している。第二部では、芸術の中でもとりわけ時間と深く関わる音楽、ダンス、演劇、映画において力動感の考え方が必要とされ、かつ実際に使用されていることを論じている。最後の第三部で力動感の発達のおよび臨床的意義が論じられている。

そこで本書の内容について、①力動感の性質、②その神経科学的位置づけ、③その臨床的意義、以上の三点に絞って概説してみよう。

①性質・力動感は身体も心も運動するように機能し、それは当事者もせいぜいかすかにしか気づくことは

できず、意識化することも困難である。その大半は事後的にしか気づくことができない性質の現象である。これが機能しなくなると、世界の興味の大半は失われ、人間関係においても、芸術の世界においてもなんら感動や好奇心をもたらしえないものへと変質していくほどに、人間の生命活動においてもつとも基本的に流れているものである。力動感が失われると、アナログ的なものからデジタル的なものへと変質していくようなものだともスタインは表現している。

②神経科学的な位置づけ・神経科学のこれまでの知見を振り返ると、力動感の生成過程についての説明はほとんど進んでいないとしながらも、脳幹網様体賦活系と扁桃体を中心とした脳幹の機能に着目している。大脳皮質感覚野に入力された知覚情報が脳幹網様体賦活系を介して扁桃体へと到達し、再び大脳皮質感覚野へと流れる。このようなフィードバック回路が作られている。たとえば、新奇刺激(例、熊に遭遇した場合)を受けた際に、情動が強く動かされると扁桃体が激しく刺激され、この回路が活発に働くようになる。この

ように人間は新奇刺激を受けた際にまず情動を介した価値づけ(好奇心を刺激するものか、それとも恐怖を引き起こすものか、つまりは快か不快か)を行い、即、行動に移る。そうでなければ生命維持さえ困難だからである。このように反応速度は早い粗雑な価値判断を担っているのが扁桃体である。この価値判断に基づいて接近/回避、闘争/逃走の行動選択が行われる。この価値判断と対比されるのが、速度は遅いが緻密な大脳皮質の五感と理性を介した価値判断である。新奇刺激に対してまず作動するのは情動による価値判断とそれに基づく行動選択であり、その後精緻な理性的判断が行われるのである。このような一連の精神過程は、まさに「幽霊の正体見たり枯れ尾花」の体験世界である。

③臨床的意義・おそらく本書の読者も評者と同様に、この点に最も関心があるであろうと思われる。患者の発したことばの緻密な意味(字義)ではなく、自分をどのように表現したか、その力動感に焦点を当てること、つまりは *Meaning* ではなく *How* に着目することの重要性を指

摘している。したがって、ごく細くで何気ないところでの直に触れる体験に踏み止まり、心や身体の動きなど、力動的な事象に着目すること。

患者の生の動きに誘発されて自らの情動も揺さぶられた体験に、治療者自身も身を没することが大切であるという。ここでスタインの言わんとしていることは土居が「勘と勘繰りと妄想」(『日常語の精神医学』医学書院、一九九四)で述べた「勘を働かすこと」そのものだと言つてよい。

患者のそうした動きを捉え、それをどのように面接で質問として投げ返すか、そこが重要なのだが、それは土居が精神療法でメタファーを解することの重要性を力説したことでもある。

具体例がいくつか述べられているが、その一つを取り上げてみよう。生後9カ月の息子と母親が床の上に横に並んでジグソーパズルで遊んでいた。子どもはパズルの一片を摘んで口の方に持っていた。母親はいつもの声で「いけません。それは食べる物ではありませんよ。それはパズルの一片よ」と言つて、子どもはの動きを手で遮った。子どもは「ウ

ーン」と声を出して、再びその一片を取ろうとした。すると母親は先ほどよりも強い口調で「駄目と言ったでしょ！」と繰り返した。その子は「ウーン、ウーン」と（さらに強い声で）反応した。母親はますます強い声で「駄目でしょ！ それは食べるものではないのよ！」と言った。子どもはさらに激しく「ウーン、ウーン、ウーン」と声を出した。すると母親は子どもの方に身体を傾けて、眉を下げ、抑揚のない平坦で、かつ怒りを込めた強い緊張のこもった声で、「お母さんに怒鳴りつけるんじゃないの！ 駄目って言ったでしょ！」と言った。するとますます子どもの声は「ウーン、ウーン、ウーン、ウーン」とエスカレートしていった。ここで母親は諦め、子どもに降参した。表情は和らぎ、急に誘惑的な微笑みを浮かべながら、母親は椅子に座り直した。そして抑揚のある声で次のように言った。「それはそんなに美味しいの？」すると子どもは一片を口の中に入れた。母親は子どもに勝利の代償を払わせた。軽蔑したように鼻をびくびく動かしながら、少し勝ち誇ったような声で

母親は言った。「それはただのボードよ。それがそんなに美味しいの」母親の子どもに対してみせた反応を理解するうえでその原家族の特徴が述べられている。つまり母親自身の子ども時代に、目の前で両親の凄まじい口論が繰り返されていた。何か欲しい物があると要求し続ける父親に対して駄目と言っても一向にあきらめず主張し続ける。最後に母親は諦めるが、その際父親に対して「あなたは馬鹿よ！ まるで赤ん坊よ！」と蔑みながら口にしていた。このような母親自身の両親の関係性が母子のあいだで再現されているというのである。

評者はこれを読んですぐに思い浮べたのは、子どもが母親に対してことさらに怒りを誘発するような行動を盛んに行う母子間のやりとりの場面であった。評者はここに母子関係の負の循環とともに、その背景に母親に対する「甘え」のアンビヴァレンスを見て取ることができる。残念なことにはスターンはそこに「甘え」にまつわる心の動きを感じ取ることができない。

スターンが本書で力説する力動感

の活発に働いている関係性は、評者が主張してきた原初的コミュニケーションの世界そのものであるが、それは土居が長年論じてきた「甘え」の世界ともいうことができる。「甘え」にまつわる心の動きを感じ取ることが可能になっているものこそこの原初的知覚であることを考えると、土居が「甘え」の世界で論じてきたことは、スターンの論じている世界と重なり合うところが大きい。われわれ日本人にとって「甘え」の世界はまさに「関係の中で得られる暗黙の体験知 implicit relational knowing」なのである。

最後に結びとしてスターンは次のように語っている。「本書で述べてきたことを、経験豊かな治療者は日頃から深く意識することなく実践している。私は特に何か新しいものを発明したと主張しているのではない、日頃何気なく行っていることに對して、それを切り取って患者理解と臨床実践に役立てようとしているだけである」。つまりは「関係の中で得られる暗黙の体験知」を言語化したものともいえる。

「訓練中の若い治療者をスーパー

ヴァイスしていると、彼らは面接の中で実際の起こっていることを、スーパーヴァイザーに報告しないことは決して珍しくない」とも述べている。何を語ったかに汲々としていて、それがどのように語られたかまで気が回らない。そのような傾向は、けっして修行中の者のみに見られるのではなく、ますますその傾向は増大の一途を辿っていると思われる。仕方ない。

わが国でスターンの名前はよく知られているが、彼の臨床の神髄についてはきほどよくは理解されていない。その意味で本書の翻訳が待たれる。

小林隆児

(こばやし・りゅうじ/大正大学人間学部
臨床心理学科)

(原書: Stern, D.N.: Forms of Vitality: Exploring dynamic experience in psychology, the arts, psychotherapy, and development. Oxford University Press, 2010.)